

森林吸収量の算定方法等に関する検討会（第5回）概要

日時：令和7年12月19日（金） 13：00～15：30

場所：日本森林技術協会 日林協5F会議室（オンライン併用）

議題（1） NFIデータの取り扱いに関する検討

NFIデータの信頼性確保の観点から、調査周期や入力誤差への対応方針について検討した。調査年の不整合や異常値について事前処理を行い、算定精度の向上を図ることとした。また、成長量の算定は年単位処理とし、入力ミス等は可能な範囲で修正して活用する方針を整理した。

主な意見：

- ・月補正は行わず、年単位処理に統一することで合意した。
- ・算定方法の一貫性の観点から、来年度以降は第5期データの最大値等を基準とした閾値設定を検討する必要がある。
- ・時系列での急激な成長変化を検出する仕組みの整備が必要である。
- ・透明性と説明しやすさを意識して進める必要がある。成長量比を基準としたスクリーニングは保守的算定として妥当である。
- ・年齢や蓄積規模に応じた成長量比による異常値判定の工夫が必要である。

整理結果：

- ・成長量算定は年単位処理とする。
- ・入力ミス等は野帳等で確認可能なものは修正を行い活用する。野帳等による確認ができないデータは棄却により処理。
- ・対前期成長量比2倍超による棄却を行う方針について確認（棄却基準の値については引き続き検討）。

議題（2） 算定方法に関する検討

従来の入れ子方式の課題を整理し、他国事例を踏まえた新たな算定方法について検討した。その結果、NFIの5年一巡特性を活用した分期法を新たに提示し、入れ子方式に代わる算定方法として検討を進めることとした。

主な意見：

- ・入れ子方式では算定値が常に算定に使用する10年間の中間年の値となり、直近5年間は外挿が恒常化する点が課題である。
- ・算定時におけるカテゴリ（林種・気候帯等）の過度な細分化は不確実性の増大につながる可能性がある。
- ・NFIの5年一巡特性を用いた分期法は説明性の高い手法である。
- ・他国においても同様の手法を用いていることは重要である。
- ・主伐等が微増、間伐等が減少傾向にある点は林野庁公表値とも整合している。
- ・不確実性は林種別ではなく、全森林レベルで示すことが実務上妥当である。

整理結果：

- ・入れ子方式に代わり、分期法を中心に算定方法の検討を進める。

- ・算定カテゴリの過度な細分化は避け、説明可能性と不確実性のバランスを考慮した整理を行う。
- ・不確実性はカテゴリによる細分化を行わず全国一本で計算する方向とする。

議題（３） 他国の算定方法や国際ルールとの整理関係

他国における森林吸収量算定方法や国際ルール（IPCC ガイドライン、パリ協定の透明性枠組み）との関係について整理した。

主な意見：

- ・ NFI を用いる国では補間・外挿を前提とした年次報告が一般的である。
- ・ NFI への算定方法切り替えに伴い、1990 年以降の過去データとの整合を確保する再計算が必要である。
- ・ 国際的には算定方法の一貫性と透明性が重視される。
- ・ 時系列で大きな断絶が生ずる推計は認められないため、簡易的であっても一貫した外挿方法を用いる必要がある。

整理結果：

- ・ 他国事例や国際ルールとの整合性を確認しながら国内算定方法の整理を進める。
- ・ 過去データとの整合性を確保するため、再計算の方法について検討を行う。

議題（４） その他関連事項

ARD 把握方法や拡大係数について、算定方法の方向性を検討した。

主な意見：

- ・ AR は発生率が低く、500m メッシュでも把握が困難であるため、方法論の簡素化と補助的手法の活用が必要である。
- ・ 過去の ARD データは貴重な情報、NFI データと組み合わせて分析することで将来の算定の基礎情報として活用すべきである。
- ・ ARD は将来的に（土地利用変化に伴う）土壌炭素量の算定にも関係するため、算定方法を整理する際に留意する必要がある。
- ・ 拡大係数については次年度以降も継続して検討する必要がある。

整理結果：

- ・ ARD 把握方法は NFI 格子点を基準とする方向とする。
- ・ 拡大係数については暫定整理とし、次年度に精緻化を行う。

(以上)